

池上嘉彦著「第II章 伝えるコミュニケーションと読みとるコミュニケーション－伝達をめぐる」『記号論への招待』、岩波新書、1984年、pp.42.-49.

- ・ 引用文は「」で括った
- ・ 術語は〈〉で括った
- ・ 補足は（）で括った
- ・ 本文にない内容、発表者の考えには※を付した

【今回の範囲の内容】

- ・ 「理想的」なコミュ～は〈コード〉から逸脱しないが、人間が関与するコミュ～は、その逸脱によって複雑な様相を呈する
- ・ 記号論の研究分野としての〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)が示される。
- ・ 人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。
- ・ 受信者が〈メッセージ〉を理解する手段において、「コード依存型」なら「解読」、「コンテキスト依存型」なら「解釈」。

【各節の内容】

■ 「『機械的』な伝達と『人間的』な伝達」 (pp.42-44)

- ・ 「理想的」なコミュ～とは、伝達内容がその過程でまったく損なわれないものである。それは「人間的」ではなく「機械的」。
- ・ 「理想的」なコミュ～は、「完全にコードの規定に従って」行なわれる。伝達回路の外からの関与は完全に排除される。
- ・ 人間が関与するコミュ～は融通性をもっている。つまり、〈コード〉の逸脱によって複雑な様相を呈する

▼ 「理想的」なコミュ～とは、伝達内容がその過程でまったく損なわれないものである。

- これは「機械を発信者と受信者として」情報の伝達する場合に当てはまる（※wwwでの情報通信など）
- 装置（機械）であれば、伝達の仕組みを作っておけば、「完全にコードの規定にしたがって作動する」。
- 「発信者」と「受信者」との「閉じた」情報伝達回路によって、外部からの関与は完全に排除される。

※ 本書での「理想的」の定義は、40頁参照

「ここでいう『理想的』とは、発信者が記号化した伝達内容と受信者が解読した伝達内容とが完全に一致していて、余分も不足もないという場合である」

- ▼ 一方、人間が関与するコミュ〜は融通性をもっている。そこでは〈コード〉の逸脱によって伝達の様相は複雑なものになる
 - 機械が関与する伝達の場合は、〈コード〉の規定を逸脱していれば、受信者は無視する(※ エラーを返す)
 - しかし、人間が関与する伝達では、受信者が拒絶されるとはかぎらない(母子の対話、詩の読者、外国人との対話)
 - 発信者もまた、常に〈コード〉の規則にそった言い方はしない(間違え、意図的に逸脱した表現など)
 - 人間が関与する際に現れる、コミュ〜の複雑なる「興味深い様相」の根源には、人間の「主体性」の存在がある。

※ 〈コード〉とは？ (p.39)

- ・ 発信者と受信者との「共通の了解に基づいた決まり」(メッセージの作成と解読のための規則)
- ・ 「伝達において用いられる記号とその意味、および記号の結合の仕方についての規定、、、が含まれる」(つまり、言語を〈メッセージ〉とするならば、〈コード〉とは「『辞書』と『文法』に相当するもの」)

■ 「『統辞論』、『意味論』、『実用論』」(pp. 44-46)

- ・ 原理的な「理想的」なコミュ〜に人間が関与することで、どのように修正され、現実的なものとなるか？その考察の準備。
- ・ 記号論の研究分野としての〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)が確認される。
- ・ 情報伝達において、私たちは、人間の主体的な働き(コードの逸脱をもたらす不確定な要因)を含めてモデル化すべき。

- ▼ 情報伝達において、私たちは、人間の主体的な働き(コードの逸脱をもたらす不確定な要因)を含めてモデル化すべき。

- ※ p40 に示された方針に修正が加えられる。つまり、術語(〈メッセージ〉や〈コード〉など)を導入して「理想的」な伝達の条件を考える(p.40)方針から、そこに人間の関与を加えた「現実的」モデルの考察への修正
- ただし、「この問題を考える前に」、その考察に必要な、記号論的な認識の枠組みを整理する。

- ▼ 〈統辞論〉(syntactics)、〈意味論〉(semantics)、〈実用論〉(pragmatics)。記号論の3つの研究分野。

→ この3つの分野は、コミュニケーションの場に存在する3つの要因に着目して設定されたもの。

- 要因1「記号」(それ自体)
- 要因2「指示物」(記号によってしめされる対象)
- 要因3「使用者」(記号を使用する人間)

→ 記号論の研究分野、その1 〈統辞論〉(syntactics)

- 「記号」それ自体と、「記号」同士のつながり方について研究する分野
- 言語学にたとえるなら、単語と単語のつながり方の規則がしめされた「文法」に着目する分野。

→ 記号論の研究分野、その2 〈意味論〉(semantics)

- 「記号」と、その「指示物」(記号が指し示す対象)の関係について研究する分野
- ※ 言語学にたとえるなら、単語とその意味の規則がしめされる「辞書」的な興味に導かれた分野。

→ 記号論の研究分野、その3 〈実用論〉(pragmatics)

※ 〈行為論〉、〈語用論〉ともいう

- 「記号」と、その「使用者」(記号を使用する人間)の関係について研究する分野
- 「理想的」なコミュニケーションの場に人間がうみだす「不確定な要因を導入」して考察する分野。

→ 人間は、、、

- ・単に「規則に支配されて振る舞う」存在ではない。
- ・「規則を変更」し、「新しい規則を創り出す」存在でもある。その変更や創出の様相は「不確定」な要因による。

※ 記号論を3分野に区別したのは、記号論学者 チャールス・ウィリアム・モリス(1903-1979, W. Morris, 米)
c.f. モリス『記号理論の基礎』内田・小林訳(1938=1988)。
詩人・デザイナーで著名な ウィリアム・モリス(1834-1896, W. Morris, イギリス)とは別人なので注意。

■ 「『コード』と『コンテキスト』」(pp. 46-48)

- ・ 〈コンテキスト〉は、〈コード〉を逸脱しようとする「使用者」と、「使用者」を拘束しようとする〈コード〉を取り持つもの。
- ・ 人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。

▼ ※ 〈コンテキスト〉(context) とは？

→ 文章の前後の脈略。文脈。(「コンテキスト」『広辞苑』)。

▼ 〈コード〉を超えようとする「使用者」、そして、「使用者」を拘束しようとする〈コード〉

→ 「使用者」(人間)は、主体的であるために、ときに、規則の支配から逸脱しようとする。

→ 一方で、〈コード〉から逸脱した記号は、受信者には伝達しにくいものとなる。したがって人間は〈コード〉の拘束をうける。

▼ 〈コード〉と〈コンテキスト〉の関係性 (※ その1)

- ・ 〈メッセージ〉が〈コード〉に従っている時 = 〈コード〉を参照して読む。〈コンテキスト〉は基本的に不要。
- ・ 〈メッセージ〉が〈コード〉に従っていない時 = 〈メッセージ〉が使用された〈コンテキスト〉を参照し、
まずはその〈メッセージ〉が読むに値するものかの判断がなされる。

- ex) 1. わけの分からない詩の作品がある (= この作品は〈コード〉を逸脱している。一体、読むに値するのか?)
2. どうも高名な詩人が書いた作品らしい (= 〈コンテキスト〉を参照することで、読むに値すると判断する)

▼ 〈コード〉と〈コンテキスト〉の関係性（※その2）

- ・〈メッセージ〉が〈コード〉に従っている時 = 〈コード〉を参照して読む。〈コンテキスト〉は基本的に不要。
- ・〈メッセージ〉が〈コード〉に従っていない時 = 〈コンテキスト〉を参照して読む。〈コード〉は役に立たない。

→人間が〈メッセージ〉を理解しようとする際、受信者が参照する〈コード〉と〈コンテキスト〉は相補的な関係となる。

→「2つの場合を両極として、その中間にいろいろな段階がありうる」

▼ 「コード依存型コミュニケーション」と「コンテキスト依存型コミュニケーション」

- ・「コード依存型コミュニケーション」 = 詩の世界、子どものコミュニケーション
- ・「コンテキスト依存型コミュニケーション」 = 科学的なコミュニケーション

■ 「『解説』と『解釈』」（pp. 48-49）

- ・受信者が〈メッセージ〉を理解する手段において、「コード依存型」なら「解説」、「コンテキスト依存型」なら「解釈」。

▼ 〈メッセージ〉の理解における「解釈」と「解説」の違い

- 「コード依存型」 = 「解説」 = 受信者は受動的に読む（※ decoding）
- 「コンテキスト依存型」 = 「解釈」 = 受信者は主体的に推論する（※ interpretation）

■ 資料 用語 〈コミュニケーション〉（communication）の意味の歴史的変遷について

- ・「コミュニケーション【communication】① 社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする。「マス・コミュニケーション」「会社内のコミュニケーションが悪い」（広辞苑第5版，p.1004）
- ・「コミュニケーション [英] communication 記号の制作、伝達、受容、解釈からなる表現の働き、もしくはその中で記号情報が循環する回路のこと」（岩波 哲学・思想辞典，p.543）
- ・communication の語源は、ラテン語の communis（共通の）であり、ここから communicate（多くの人々に共有のものとする、分け与える）という語がうまれた。この語義は英語において15世紀からあった。一方20世紀になって、情報通信技術が発達すると、communications は、特にアメリカにおいて情報や思想を「伝える」印刷や放送に使われるようになる。このように、この語には、ラテン語由来の「分かちあうこと」（双方向の共同作業）と、20世紀以降の情報通信技術の発展を背景とする米国由来の「伝えること」（一方向の作用）という2つの意味があり、それらが歴史を通じて複層で影響をあたえている。

（上は、レイモンド・ウィリアムズ「コミュニケーション」『完訳 キーワード辞典』椎名美智ら訳、平凡社、1976=2002、pp.68-69.をもとに、石井が要約のうえ解釈を加えたもの）